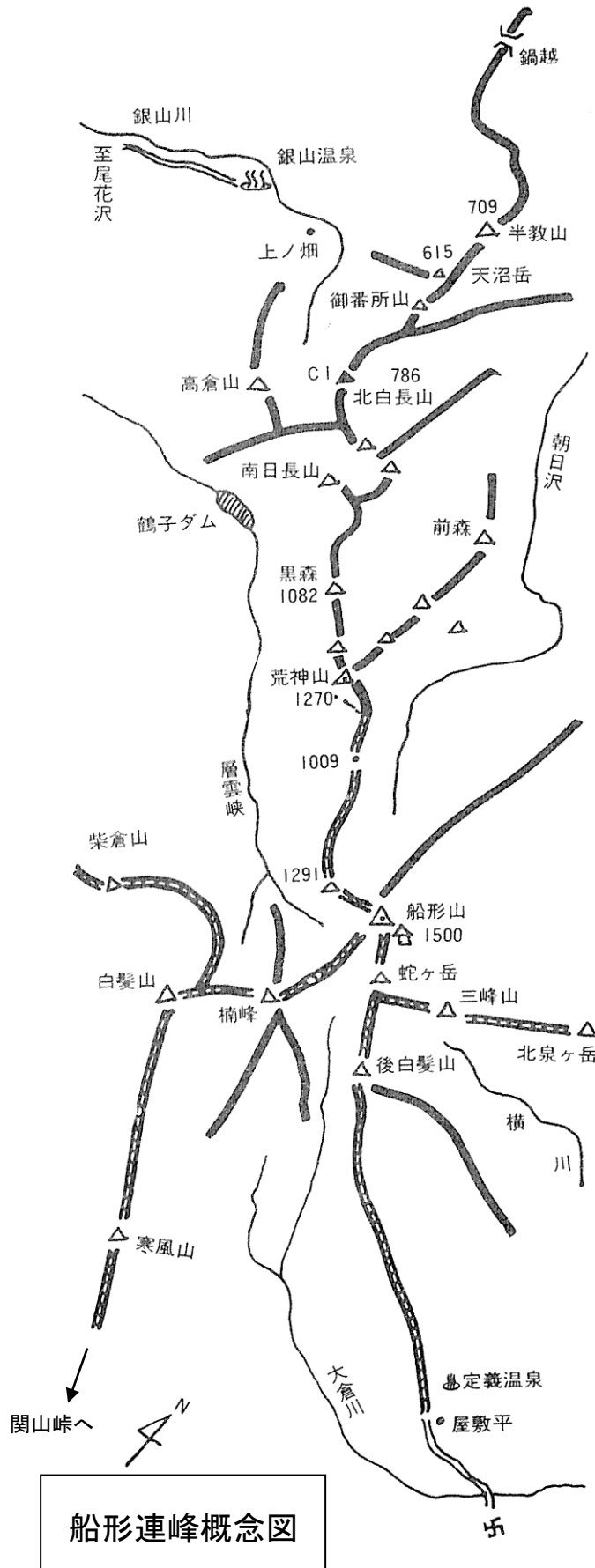


第一章 仙台山脈

蔵王連峰―笹谷峠―関山峠―船形山

「仙台山脈・・・私はこう呼ぶのだ。」

仙台平野の東端、多賀城の丘に立てば西方に聳える県境背稜山脈のスカイラインがパノラマとなって展開している。年に何度か栗駒とか吾妻の一角を奇跡的に見ることがあるが、泉ヶ岳から蔵王の不忘山までの山並は四季折々の姿で私達の目を楽しませてくれる。」



船形連峰概念図

関山峠から船形山まで

宮城県岳連 仙台山脈縦走の記録

昭和四〇年 三月九日～一三日

我々仙台YMCA山岳会は県境尾根の全山縦走の計画が岳連より発表された時より多大の関心を示さずにはいらなかった。それは誠に雄大なスケールと未知への憧れをたえた素晴らしい計画であり、我々仙台岳人の密かな夢の現出でもあった。何しろ全長二〇〇キロメートルの脊稜山脈、しかも未踏の地帯が半分を占めているし、冬季の縦走と云うことで岳連が一大奮起して初めて可能な大事業である。

我々山岳会は会員数が二十名に満たぬ微力な会である為、計画当初より未踏地帯は他に譲り、馴染深い船形以南の一角を希望して、幸い他の会とは重複することなく決定された。夏山、そして秋山と数次に亘る無雪期の偵察を繰り返し、十一月下旬には冬山の序曲たる新雪ラッセルの中に旧年偵察を完了した。これにより問題点は関山く白髪山間の雪庇及び白髪く仙交コル間の複雑な地形にあると考えられること、及びポローラー方式とラッシュ方式を検討した結果、船形山頂にて確実安全なバトンタッチが出来ること、少数のサポーターでカバー出来ること、下山コースが市役所パーティーのコースと一致することなどから他山岳とは異例のポローラー型式を採用することに決めた。ポローラーなどと云うと些か大袈裟すぎるが、過去に幾度か厳冬期船形を繰り返してきた経験上、少数によるラッシュ方式の困難性は身に沁みて感じており、当会では初めて取組むポローラーの訓練として行ったものである。

二月二一日

今年初の偵察が関山々見晴台間に行われた。アタック隊長の畠山他三名であった。積雪もほぼ安定し、コンデイションもほぼ良好の結果を得た。且つBC（ベースキャンプ）予定地点の炭焼小屋が使用可能と報ぜられ、大変有利な条件が揃った。雪庇は可成り発達していて、積雪平均二メートル。

二月二八日

第二次偵察隊が荷揚げを兼ねて行われた。この日は悪天候で且つ一メートルの新雪が積もり、ラッセルはワカン使用で腰に達し苦戦したが予定の見晴台まで行けず、尾根中途に冬用天幕二基分をデポし、ズブ濡れで帰還した。前の偵察から一週間間にコンデイションは厳冬に戻ってしまい、この状態が続けば縦走は非常な困難に直面することになる。

三月七日

第三次偵察隊はBC地点の炭焼小屋の除雪を目的とする。前回の積雪はやや締り、コンデイションは少しよかったが依然としてラッセルは膝くらいはあり、本番を二日後に控えて些か不安は残る。小屋は三棟あり、粗末な柴小屋であるが屋根上に二メートルはたっぷり雪を貯え大地の雪と一体になっていた。除雪は角スコップでブロックに切り次々に乗り出して進められた。次いで入り口に入る通路が掘られ、小屋内部に吹き込んだ雪を外へ出した。二棟が居住可能となったが、一棟は積雪重量の為、小屋は傾斜し柱が折損していたし、又他の一棟は屋根の半分が骨だけなので柴を入れて雪を積んだ。かくてBCは確保され、作並街道と小屋間のラッセルも念入りに踏んでおいた。

三月五日

我々山岳会に北署の高橋警部補が通信担当でアタック隊に編入と決った。七日夜の最終



準備会に出席されて、慌しい準備のさなかに全員に紹介された。いざ準備完了となつてみると個人の負担するザックの重量が予想以上に大となり、アタック隊にもサポート隊と変わらない重量が割りあてられる事は避けられなかった。

三月九日

午後四時頃より隊員は次々とYMCA会館に集合して来た。背負い子の改造・パッキンに調整とまだまだ忙しかったし、残留部隊の炊き出しなども多忙であった。午後六時、県警トラックが到着。荷物の積み込み、次いで全員十二名が乗り込んだ。多くの人々の見送りを受けて夜の巷を一路関山峠へと出発した。車内でおにぎり、いなりずし、他の夕食を食べ、全員意気健昂たるものであった。作並でチェーンを巻き、更にその先三キロメートルで全輪にチェーンを巻き、運転手の方には大変御苦労をかけた。

全員ワツパを履く。九時三〇分、坂下大曲点着。途中の小雨からここに来ては雪となる。空身の三名が直ちに小屋までのラッセルと小屋の準備に出發。それを追って約二〇メートル奥まで全装備が運搬された。二日前のラッセルが有効だったので小屋までは比較的楽であった。シュラフ食器などをと入れて他は全装備C小屋に積み、A小屋に七名、B小屋に五名と分散する。全員就寝後、気象係のみ十時の天気図を描く。日本海の低気圧は一〇〇ミリバルで発達中。大きな寒冷前線を伴って東進。明日はかなり荒れそうである。

三月一〇日

新雪は一〇センチ。午前三時全員起床。気温マイナス四・五度、北の風一〇メートル。寒気の中に全員オーバー類を着用し、B小屋で天ぷらうどんの熱いところを食う。

稜線上の樹海が海鳴りのようなひびきを轟かせ季節風のものすごさを感じさせる。谷間のBC地点にいても一〇メートル位の風がある。稜線の行動に一抹の不安を感じざるを得

ない。ローソクの光の中で全員一二名の立ち食いが終り、テルモスに湯をつめて全員外でパッキング。まだ暗いので懐中電燈で照らしながら、五時出発の予定がこの荒天で少し延びる。ワツパを履いて重いザックをかついだのは六時一五分をまわっていた。

雪と風、重装備、ラッセル。停滞か、前進か、かなり極どいところまで隊長は追いつめられた悪コンディションであったが、とにかく第一ピッチ稜線尾根上まで行くことにした。好天時はアタック隊のみ関山を往復後、サポートと合流の予定であったが、これは取りやめざるを得ない状態なので下山後のアタックとした。又、重量が予想外だったのでサポート、アタックの区別なく許容重量を超えたオールサポート隊の進軍であった。なお、昨夜、今朝とも無線機は不通である。

六時一五分 沢のスノーブリッジを亘り、夏道添いにトラバース。時々ワツパ不良の者が出てワツパ履き直しをやり、ペースが乱れてうんざりする事しばしば。ラッセルは膝位あり、そのまま沢底に入り直登、急斜二俣より雪やや締り、一列縦隊登行。

七時一〇分 夏道中途、大切株（赤点標示あり）で全員一本。視界は一〇〇メートル。起きてすぐの急斜（三〇度以上）なのでさすがに全員息を切らしている。風は東となり斜面を突き上げ顔面に雪つぶてをくらし痛くて困る。休みも又辛いものと見つけたり。

七時五〇分 大株より更に直登、斜面は四〇度位となる。やゝ右手に寄りながら林界に到着。全員一本。樹林帯なのと丸坊主の壁を突破した安堵から、わりあいくつろいで休憩出来た。しかし、稜線の風は厳しいのでその前にスタミナをつける為、第二朝食を全員に食わせておくことにした。高橋氏は、さかんに交信を計ったが電波は通じなかった。休憩中、畠山、田中、千葉の三名は林界の深いラッセルと雪庇突破点のために空身で行動し、ルートをはらいた。五メートル程の雪庇はスコップで切られ、階段をつけられて上出来である。稜線は予想通りの強風で西二五メートル〜二〇メートル。降雪はなく地吹雪であり、霧氷の花が満開であった。なお先日デポした天幕二基はウロ桂より越後君のザックに載ま

れて雪庇の上を運ばれて行った。

九時四〇分 一本立てる。出發後、三時間半、しかるに我が隊の速度は非常に鈍く明日の行動を思うと前途が暗くなる。悪天候、ラッセル、重装備どれもが災いしている。何とか善後策を立てなければならぬ。前白髪C1はとても無理だ。寒風もあぶない。とすると可能な地点はアオの背あるのみである。何せ重装備では進軍が困難なのでアオの背に全重量を投下しC1を建設し、しかる後C2装備を分担し鋭意C2地点を前進させようと決意した。又アタック隊六名より今出良子と沼田克己をC1勤務とし二名を削り今出隊長を加えてアタック隊の強化を計り且つ一か八かの長距離アタックに備えることも決意した。沼田は先日より左足に負傷をしていて、BCで治療をしていたし、良子はコンディションが悪いので控えるべきであった。畠山、越後パーティよりずっと後方に離れてしまう。

◎ 天候は西の風一五メートル 気温マイナス 七度

◎ 通信機は依然として受信不能である

一〇時 風間氏をトップにサポート隊が前進、やっと後方に今出、赤布標識をつけ且つ八ミリ撮影しながら行動、更に後方、畠山、越後あり、トップとラスト間二〇〇メートル今出無名峰に立った時はトップ隊は東ヘラッセルを残して別尾根を誤って下り始まる。驚いて、ザックをデポり空身で追い二〇〇メートル程下った。パーティを呼びとめバックを命じる。その間に畠山らも頂上に立つ。この頂上は林となり視界悪し、しかし方角が一〇〇度以上も誤ってしまっている。通信が本部と可能となり全員ほっとする。

一〇時四五分 見晴台に到着、一本立てる。この付近より雪庇は見事に発達したま五〇〇メートル位の視界を得て眺める時、我々はまさに雪庇の縦走をやっているのだと感じる。我々は苦しい縦走をなおも続けワッパの爪だけのぼり又、這松のおとし穴にはまりピッケルやストックで風に対抗して歩きつづけた。

十二時 アオの背直下に集合、一本立てさせC1地点を偵察する。偏西風を直接受けず、



しかも縦走路上に欲しい。一〇分位で適地を見つけ、再び移動、穏やかな雪庇の下に雪面を削り全員で足ぶみしてC1を建設する。全員テントに入りホエブスを焚いて暖をとり昼食をとる。又、アタック隊の再編成を発表する。慌てることなし全員ゆつくりと休息をとり前後の打合せを行う。アオノセ頂上より縦走路手前一五〇メートル地点。西側はブナの樹林である。

一三時五〇分

アタックメンバー 畠山 田中 江間 高橋 今出

サポートメンバー 風間 越後 工藤 千葉

C1メンバー 沼田 今出良子 中林

アタック隊、サポート隊、出発する。装備の上に雪が積る。次々に予定が遅れて行くが今度こそはと全隊員が意気込んでいる。重量も大部軽くなりピッチも倍加した。さあどこまで行けるか、サポートが日没までに帰れる距離は奥寒風が限度でアタックは更に前進を続け前白髪まではのぼしてやる。視界は相変わらず悪く一〇〇メートル位で時として二〇メートル位にもなってきた。寒風の頂上に来た時も全く視界が悪く、又巨大な雪庇が頂上全体をおおってしまい頂上と断定出来なかった。しかるにその降路は非常に急峻でルートを選んでおいてはどうかと心配であった。しかし、畠山のトップで彼の信念に頼って正しく尾根をたどっていった。そしてこれこそ寒風と思う頂上に立ってみたらそこに奥寒風の山頂標が頭を出していた。ずいぶん歩き慣れた道であるのに山の魔術にはかなわない。視界を奪われると高度感覚まで奪われるものなのか、尾根上の小ピークと思ったが雪庇が山の形を変えてしまい山頂標を呑み込んで寒風をいつの間にか通過した。これは笑うに笑えない山の神秘であろう。

奥寒風にてC1と交信した処、沼田が旺んに呼び出し中であった。その目的は我々がウインパー極光号をC1に置き忘れていたので直ちにもどれの通信。現在、沼田はアオの

背・寒風ルート中間追跡中。驚いて点検した所、背負い子にのっかっている筈のウィンパーがない。一番大事なウィンパーを忘れるとは何たる不覚。しかし、最初は信じられず小型赤テンの事と思いそれはわざわざC1に置いてきたものなりなどと交信していた。そこで前進を断念、奥寒風を若干降り、さっきマークして居いたC・S適地にC2を決定。今出とサポート四名は直ちに往路を戻ることにした。今出はC2に再び戻る関係上ピッチを上げてサポートを追い抜いて寒風山に登る。寒風山頂上より左手に直角に曲り降る事しばしちようど寒風、アオの背、鞍部にて沼田と迎合ウィンパーを受領してすぐ別れて戻る。

十六時五五分 ウィンパー受領後、直ちにC2に向う。しかし、すぐすれ違うはずのサポート隊に逢うことなく寒風を越し奥寒風とのコルにかかる。田中が出迎えに来てくれウィンパーは田中にタツチ。

十七時二〇分 C2地点に田中、今出戻る。C2は整地され風上に高くブロックが積まれて設営は明るいうちに完了した。十日の行動は結局ここに着いて終りと云う事になるかと思われた。前白髪はおるかC2にもして奥寒風である。しかし全員あらん限り戦ったのだ。又大きなミスもあつたがここに至ってはやむを得ない。明日の作戦を最大限に活用するならばまだ、勝算はある。田中と私の胸にかすかにのこる不安。サポートの四名は無事に帰ったか、どうか。

その後C2が落ち着いてから、C1との交信でサポート帰らずの入電。やっぱり寒風頂上で迷つたに違いない。畠山と私が出かけてみよう。またえらい事になってしまった。あわてても仕方がない。ゆっくり夜食を取ってからと云うことにする。

十九時四〇分 今出、畠山完全装備でC2を出発する。サブに非常食、ツェルト、スコップ、テルモスを入れて懐中電灯をもって出発。九時三〇分までは必ず帰る事にする。迷つた地点は寒風山から西に派生した尾根であり気がついて戻り頂上付近にいるのではないかと思われる。寒風山は冬姿が全く変る。それ以外は一本尾根である。風雪は止み視界

もきいて来た。時々立ち止まりエールをかけたリライトを振ったり消して他の光を探したりしながら寒風山に登る。迷い尾根の方角にピカリと光るもの。再び光る。目をこらすと遠い山形市の光らしい今度は頂上の林の中に光るもの、星が出たのだ。迷い尾根に入った時、十分に確信をもって降りたものか。ラッセルとか赤布がなければどん底まで降りる事は誤っている。気付いたならばすぐ確信のもてる所まで引返すべきである。今夜、見つからなければアタックは断念して捜索をして山行を放棄しなければならぬ。そんな事を考えながら頂上の白いドームにかかる時、トップの畠山が雪穴からひよっこり出て来た工藤を見つけた。倒木の雪の祠を利用して四名のサポートが元気で中にいた。やれ、うれしや。聞けばやっぱり迷い尾根をたどり急ぐ余りでどん底まで高度を四五〇メートルも降り気が付いた時は遅すぎて頂上に戻るのがやっとなので視界が良くなるのを待って待避中であつたと云う。

二〇時十五分 今出、畠山と協議。今出はサポート隊を引率してC1に帰り畠山のみ単独でC2に帰る事にする。畠山先行。サポート隊、身仕度ワツパを整えて穴の外に出る。視界良くなり半月出る。畠山のライトが雪に反射し蛍のように山をかけ下って行くのが見えその先に奥寒風とC2が小さく見えた。今出は四度、寒風の頂上を踏んでアオの背に向いC1地点に近づいた。

C1地点のやゝ手前で一度C1テントを探すが見当たらず更に降る途中、沼田の灯が近づいて直ちにC1帰着C2のトーカーを畠山が持参したのでC1とは常に交信していたのでC1では既に了解済みであった。今出、沼田、帰還後すぐ雪洞を掘りザック倉庫をつくり又隣りにトイレ雪洞をつくった。C1は今夜八名泊るので超満員である。今出はC2にシュラフを置いて来たので皆んなから毛布背広なども恵んでもらいどうやら暖かく泊らせて貰った。全員就寝は十二時に近かつたと思う。今夜のドサクサの為十時の天気図は遂にとれずにしまった。



三月十一日

撰氏マイナス七度 晴 西五メートル

六時 C2と交信、今出がアタックを追尾する旨、打ち合わせる。

六時四〇分 C1より今出サブでアタック隊に合流の為単独出発。C2も昨夜遅かったので出発は延びそうだ。

七時二〇分 C2到着。アタック隊、出発準備中。

七時四五分 C2を出発する。天気良好軽装で飛ばして本山を手に入れんものと全員張りきる。しかし、奥寒風、戸立山間は難所であった。付近は雪庇発達も七〇メートルにもなり末期状となり随所々崩壊又は亀裂激しくやせ尾根なので西側に逃れんとするが急斜且つ藪こぎで緊張の連続でありトップはしばしば陥没の危機に曝された。気は健昂なれども易き縦走は許されず加うるに再び地吹雪を呈して来た。

八時二五分 戸立山 頂上、地吹雪の間に白髪山が見える。

九時 前白髪ここで大休憩、第二朝食とする。

九時四〇分 白髪山直下。本部との連絡に渡辺氏が出て会話する。雪は比較的シマって居り時々赤点樹を発見しついついペースで進行している。赤点も雪の下が多くて不足なので赤布をつけるが前日に数十枚使用しアタック隊の保有も四〇枚位しかないので節約しなければならない。又雪堤上はつけるべき枝もないので処々スコップでブロックをつくり雪のケルンを作ることにした。四〇×四〇×三〇位のブロックを二つ重ねて対に重ね開門をつくったり又、単にブロックを一ヶ切取っただけのものもある。又標識竿の運搬は大変邪魔なものであり特にヤブコギに於いて苦心した。白髪山へは巨大な、しかし安定した雪庇が一本力強く走り頂上へとつづく。

十時二五分 白髪山頂上を通過する。頂上は強風が荒れ狂いシユカブラが発達し巨大な

ものもいくつかあった。山頂標は樹氷となりスコップでたたき落して頂上を確認した。気温は摂氏マイナス九度。風速は二五メートルはあるかと思われる。全員元気であるが高橋氏や、不調の兆しあり、ペースを若干おとす。竿を数ヶ所使用、尾根を忠実にたどり右手に直角に曲って自然園への下りにかかる。猛烈な強風が山形側から吹いている。ここは黒伏、柴倉の弯曲した障壁と白髪山から西へ突出した尾根とがあたかもジョーゴ状に集中する所でいつでも風衝の強い所だ。その為、着雪は少なく小灌木が所々露出し雪氷盤が薄くて足が陥没する。大男の田中でさえ風に奔ろうされて何度か吹き飛ばされた。

十時四五分 摂氏マイナス六度

自然園を通過、この付近、去年立てた赤ペンキ竿は無事に立っていた。風衝地帯の為雪没を免れているものだ。八ミリ撮影の為、標識の樹氷を叩き落していた所いきなり顔面に吹っ飛んで目から火が出た。皆におくれるし目は見えないし大いにくさった。パーティは林界を敬遠し刈払い帯をとって下っていた。ここよりラッセル帯となり膝位のラッセルとなる。ラッセル交たいを続けて千二百ピークに立つ。しかし残念、大きな雪庇が進路にあつて仙台カゴに下る事出来ず。若干戻り下方より深いラッセルをしながら雪庇の下をトラバースで切りぬける。我々はラッセルを軽くするつもりで栗畑を捲いたが大同小異だったらしい。仙台カゴ目がけて進む。

十一時二五分〜十二時十五分

栗畑上方 仙台カゴ直下 摂氏マイナス五度。

昼食と休憩の為、大休憩。ツェルト使用。

今出、高橋キジをうつ。雪面を這う風は情容赦なし。

高橋や、疲労しておりパーティのペースを落すので一人この地点で雪洞停滞したい旨、相談あり。しかし危険なのでパーティは全員一致行動を変更、ペースを更に落し、今日の行動は早めに終えて明日のアタックを計画仙交小屋を目指す。



十三時十五分 天気くもり。風若干弱まる。

仙台カゴ 楠峯のコル付近、一本。本部と交信、予定一日延期を通知し、YM 本部、各家庭に連絡方要請する。又、市役所隊にもお願いする。又、C2にいるサポート隊にも指令し雪洞ビバークをして明朝アタックの旨交信した。その地点よりやゝ下り楠峯頂上直下二、三〇メートルのトラバス入口で風をさけて一本立てる。トラバス入口に赤点一つ発見され稜線の雪庇を警戒して夏みちをたどる事とした。必死に赤点を求めたが発見出来たには僅かである。他は雪没したものと見える。トラバースを終りあとは稜線上をゆく。

十四時 楠峯東稜付近。ウォーキーの交信は電波が入らず不能となる。

十四時四五分 仙交コル付近。

畠山、今出、全員を待機させて、仙交小屋を偵察するが発見出来ず。赤点を三つ発見したにとどまる。たとえ発見出来ても小屋は完全に雪没し小屋に入るのも長時間除雪に要し、且つ小屋内部の吹込み雪の処理に苦心するならばかえって雪洞の方が温かくて手つとり早いと判断、雪洞適地点に全員を集める。

十五時十分 雪洞作りに着手。スコップは一挺しかないので能率よく短時間交換で働く。今出はコルからの尾根の状態を偵察に行き且つ仙交小屋を捜したが地形は全く変化して判断がつかない。赤点を去年つけた時は分岐までしか付けなかったので赤点の消えた所を重点的に探してみたが駄目であった。赤点もあの当時、樹が氷っていたので禿げ落ちて幽かであった。目の前に明らかな尾根と雪庇があり確認の後C3雪洞に帰る。摂氏マイナス六・五度 通信はウォーキーが杜絶。ハンディは交信薄くなり電波あれど聞きとれず。

十七時二〇分 雪のコンディションがよかったので一挺の角スコで立派な雪洞が出来た。約二時間の労働であった。手すきの連中は木を集めて折りエアマット代りに雪洞内に敷きつめた。又、入口はブロックで半分埋め狭くして風を防いだ。エアマットは一枚しかなく高橋氏に使ってもらった。ツェルトをかぶりホエブスを焚くと体はたちまち暖かくな

り心強い。

全食糧を点検してみた、夫々各自の非常食、余裕食糧が出される。ドーナツ箱入り二箱、クラッカー羊羹、チーズ、キネンパン、甘納豆、練乳、乾パン。スルメ、レーズン、氷砂糖、みかん、林ご、コロツケパン、ビフテキにウイスキー。数え切れない程出て来て雪洞内は急に明るくなった。

又、市役所隊に差入れる予定の角ビンウイスキーは緊急事態に対処してカロリー補給の為、我々で消化しなければならぬと判断した。高橋氏のおくさんのお料理ビフテキでごちそうになったウイスキーの味は全く豪華なものであった。

天井を食器でけずり、飲みものに不自由はしなかった。ホエブスとWガスーリットルタンクは大変有効であった。又小型コツヘルもよかった。ローソク、カイロも全員にあった。皆も疲れていたので靴のまま柴の上に寝た。背あても柴で雪の壁によりかかって全員かたまりツェルトをかぶった。

夜はさすがに冷えた。ホエブスの熱も火をとめると雪の壁にすーっと吸いこまれてじき寒くなる。ビニールでもいいからシートが一枚あれば又違っていたであろう。この頃から畠山の様子が悪くなり、洞外で出て旺んに吐気を催していた。

夜十二時 靴の中の足が寒さの為に激しく痛みだして全員起きた。ツェルトをかぶってホエブスをたく。たちまち暖かくなって又ツェルトをかぶりなおして眠る。ツェルトに五名は無理で、両端の人は半分しかかぶれぬ。

三月十二日

午前二時 再び全員起床、ホエブスを焚いて暖をとる、未だ早いのもう一度眠る。全員着られるものは全部着ていた。目出帽で眼だけ出し手袋もオーバーミトンを着用、寒い中でもけっこう一時的に深い眠りに落ちる事が出来る。雪洞内ラジオが欲しかった。

三時 起床、あゝ夜あけが待遠しい。気温摂氏マイナス五度 洞外は星空であった。晴れてくれ、いや百メートルでもいいから視界だけ与えてくれ。

四時 朝食をたべる。畠山は胃がやられて苦しうであつたが彼は決然と出発することにした。

五時 洞外は未だ未だ真暗である。これでは行動も出来ぬ。

五時四〇分 ワカンを履いて薄明の外へ出る。雪はやゝしまり調子がよい。風は微かで天気は晴れている。間もなく船形山へのダイレクト尾根にとりつく。明るさはみるまに増して展望がひらけて来た。

右手に重量感の溢れる後白髪がみえる。しかし、これはいかに、その頂上は激しく流れる雲におゝわれて、ただならぬ気配であつた。それは不気味な南風である。この分だと本山ではシゴかれそうだと皆覚悟した。ダイレクト尾根は巨大な雪庇をなし、すこぶる快適な登りである。ワカンの爪をきかせて雪庇の根元近くをジグザグ登行する。

六時四五分 船底平に着く。雪庇は雄大でしかも危なげない。この付近は夏だといつの間にか通過してしまう処だが冬は全く変わった趣きである。しかし遠望がきかぬのが残念至極、無線機は何度か仙台と交信を試みたがいずれも失敗。意外にも新潟の無線は明瞭に傍受した。ハンディ・トーカーC2のサポート隊とは交信が不能になつて来た。高度の関係であろう。休けいとし行動食をくう。ラストの今出は八ミリシネ記録の為、約二キロのカメラを胸にブラ下げて撮影を行つていた。

まあたらしいカモシカの足跡が乱れていた。この付近からいよいよ濃霧帯となり次第に南風が強くなつて来た。雪庇は遂に南側のみならず北側にも発達し、珍しい「両刃の雪庇」が見られた。

我々は残り少なくなつた赤布竿を立てながら傾斜した乳白の世界を一步一步踏みしめて登つた。やがてシユカブラ地帯となり、トップ畠山隊長自ら雪洞スコップで大きなステ



朝日連峰、大朝日岳山頂

ツブを切り高度感はしきりに身に沁みて登頂真近の感激に新たなファイトを燃やす。クラストの下はザラメ化した雪でワカンの爪もきかずピッケルを両手で水平に保持し、四ツん這いで黙々と登る。頂上真近と思う頃八分目は雪に没した指導標に出る。これは頂上五十分メートル地点。泉・定義方面分岐点である。こゝからトップを交換、今出が視界数メートルの頂上捜査となり先行、間もなく確認し、高橋氏に登頂を譲りつづいて我々も一等三角点とおぼしき所に連った。

こゝで我々は感激のバンザイを叫ばずにはいられなかった。時に十二日午前八時ちやうどであった。

シュカブラに飾られたケルンの蔭でサポート隊と交信

「わが旗はいただきにあり」と送信

「おめでとう、健斗を感謝する」と返信

又高橋氏は宮城支部北署に登頂成功の旨発信した。記念撮影も出来ずに我々は飛ばされないうちに市役所隊屯所をさがした。赤旗が点々と現われ、それに導かれて東へ五〇メートル下った。霧氷におゝわれた天幕を発見、大声でヤッホーと呼びかけると転がるように二人、三人の山男が飛び出して来た。畠山隊長と市役所隊大泉隊長が感激の握手。外は厳しいので全員市役所サポートの雪洞に休けいさせて貰う。市役所隊はそろそろ頂上に出て我々を出迎えるつもりでいたと云う。又昨日は予定通り正午前にこゝに幕営を完了し待機中であつたとのこと。誠に遅延のことは申訳なかった。

メッセージを大泉氏に手渡したが、これにはC1に居る笹の今出会長が大泉氏にあてた文面で差入れウイスキー角瓶一本と書かれてあつた。しかしそれは既にフォストビバークにてカロリー化され、その事を詫げる。

又市役所隊が宮崎隊にタッチする時の為に宮崎隊長あてのメッセージもお願いして手渡す。いずれも透明ビニール袋に密封してある。

雪洞の中で我々は熱いコーヒーのもてなしを受けた。世の中にこんなに旨いものがあつたかと思う程それは我々を恍惚とさせた。

我々の下山の時間も迫つて来た。市役所隊サポート隊も定義に下山すると云う。任務を完遂した高橋氏はこのサポート隊と一緒に下れば比較的楽に下山出来るであつたらうがサポート隊の勧誘をはつきりと断つて我々と最後まで行動を共にしてくれた。高橋氏の身を安じて云つてくれた助言であつたらうが、その事自身我々は全く考えられぬことであつたので一瞬不思議に思つたのであつた。

大泉隊長が視界ゼロの頂上まで見送つてくれた。市役所隊の健斗を祈つて全員で握手、強風に向つて一旦南へ下り後は逆落しに降る。この荒天では市役所本隊はえらく難儀するに違いない。否、新しい行動は不可能ではないか。又、同サポート隊も撤収には相当の困難が予想される。同隊は後白髪山を下るまでのおよそ六キロメートルは視界の効かない雪原状尾根地帯だからだ。

頂上滞在一時間十分、我々には今先来たばかりのラッセルがあるのでそれを忠実にたどれば無事に霧氷圏を脱出出来るのだ。霧氷圏は標高千二百メートル以上であるから三百メートルの降りののち、即ちにして息の詰まるような乳白の世界から解放された。以後はC3雪洞地点までシリセードをやりながら大いに愉快な下りであつた。

肩の荷をおろして皆んな喜びの色が溢れていた。とりわけ高橋氏のひげの顔には察するに余りある安堵の色があつた。C3には十時半着。こゝは嘘のように静かな世界であつた。気温は零下二度、第二中食をとり、二十分間の休息をした。雪洞内の柴の上で少し寝ころぶ。

鳥山は未だ食欲を回復しないが超人的粘りで再びトップで出発、続く隊員高橋氏、田中、江間と続く。殿りは今出、一・五キロの八ミリカメラをぶらさげて……これがアタック隊のレギュラーオーダーである。

余り静かな雪の山、風も途絶えて息づくものは五人の人間のみ……。と！前方に矢の如く走るもの：あ兎だ。その俊速に我々は感嘆の声を放つ。

そこに小ピークがあったので「ダットの山」と銘名する。三人の男はゆっくり柴煙を味い二人の男は雪合戦をやる。十分の休みの後、十一時三五分ダットの山から楠峯のトラバースにかゝる。雪が重たくなり気温が上ってきたのか雪がくさりワツパ重し。ポツポツと雨がきた。しかし大したことなく済んで有難い。

楠峯直下十二時 昼食を簡単に十五分で済ます。昨日のラッセルはほぼ残って軟雪地帯の仙台カゴ方面へと我々を導く。仙台カゴの直下、樹林界で聖一一五センチのサルのコシカケを発見、ピッケルで叩いて採取した。

サポート隊との交信も順調に行われC1、C2 糞間を定期便と称し緊密な連絡を持っているらしい。天候も良好らしい。栗畑上方にて一本、十三時である。

風衝地帯自然公園を通過する。再びガスってきた。そして南方よりの強風……。一難去って又一難、視界は五メートルもない。布設した赤布竹も次の一本までが大変だ。シユカブラの高原状頂上では容易なことではない。頂上と思われる所で一旦行動を中止し確実な針路を捉えるまで停滞を命じ畠山と今出が偵察に出発する。しかし仲々発見出来ない。遂には今きたラッセルと結びついてリングワンデルングとなる状態でガスの晴れ間を待つ為、全員が赤布竹に集合しやゝ待機。

地図、磁石により観測したところ意外な事実を発見した。それは激しく吹きつけていた南方の風が頂上でいきなり西の風に変化したことだ。これ程顕著な風向の変化は未だに経験したことがない。時は刻々と経って皆の顔にも変化が現れてきた。又も雪洞ビバークか、それにしても食糧は幾ばくもない。予定日数は既に一日オーバーしている……。それにしても白髪の頂上がこれ程、曲者とは思わなかった。この付近には数本の赤布竹を散らし且つ所々雪のブロックケルンを作つて来たのに降り口さえ判ればあとはヤセ尾根、迷う気づ

かいはさほどない。先決は山頂標の発見にある。

再び畠山、今出が予想地点に扇状に偵察する。風が魔力を失えば間もなく新たな霧水にかざられた山頂標を発見した。一時はビバークかと暗黙のうちに覚悟した我々だったが地獄に仏とばかり躍り上って喜んだ。

後はスムーズに霧水圏を脱出し、前白髪で一本立てる。記録によるとガスで視界ゼロ、気温零下二・五度、風速二五メートル、停滞十五分（十四時十五分から）とあるが記録の間違いではないかと思われるほど、長く感じられた。

以後の縦走路は雪庇の上の一本道、戸立山の手前で一本立てて風を避けて第二昼食、戸立山は一五時五〇分、通過する。サポート隊との交信でC2では飯も炊き上り汁も出来ているとのこと。時間も時間であるのでC2のサポート隊は直ちに帰還するように指令する。

奥寒風頂上に着いて寒風に向いエールを上げれば遥か彼方より応答あり、寒風山頂の肩にサポート隊、工藤、風間、千葉、越後の四君が蟻のごとく見える。互いに山と山から無事を祝い労をねぎらう。

C2着十六時四五分、気温零下三度。高橋氏や、疲労、ポリタンからグツ！と飲めば何んとガンリンであった。畠山は顔色優れず、しかしワツパを脱げば皆けっこう元気になった。米の飯はまだ暖かくしみじみと満腹を楽しんだ。アタック隊の目的を果し皆んな少し興奮しているのだろうか、お喋りも尽きず、寝たのは余り早くない。一人一人個性のあるいびきを聴きながらポリウムをあげて気象通報を描く。気象係はC3雪洞が不時露宮であったので気象の用具を持参せず且つ、その前夜は寒風山搜索の為、天気図が取れずじまいで二日間も空白を設けてしまった。しかし、明日は一〇〇〇ミリバールの低気圧が本邦に接近し下り坂になると考えられる。明日は下山だ。一日遅れたりとは云え、本計画では一番最初にリレーに成功したのが我々であった。市役所隊の健斗を折って気象係もいびきのコーラスを歌うことにする。



三月十三日

起床六時 零下三・五度。

まばゆいばかりの上天気だ。朝食は七時にできた。なごやかな朝餉。明るく輝くオレンジイエローの天幕内部。朝茶のうまさ：アタック隊長も食欲を回復した。ついで撤収を開始しようとする頃サポート隊が到着した。七時五十五分である。

全員の協力で極光号はシヨイコに積まれる。遂に高橋氏はザックを取上げられて空身にさせられた。氷化した極光号の天幕跡で皆で「ことほげ、今日の山」を合唱した。

その頃からあの上天気はすっかり影をひそめ雪空となって来た。記念撮影の後、オーダーを組んで奥寒風を降りる。時に九時十分である。重い荷も今は軽く感じられ九名のパーティは寒風山を通過する。所要タイムは僅か三十分。天気は最後まで味方せず粉雪が飛びはじめた。寒風山頂よりC1と交信する。C1の三名は既にアオの背頂上にて出迎えの為待機中であった。

アオの背十時二十分。雪庇をムカデのように這い上ったパーティと三名のC1サポート隊がピークで迎合した。「ヨカッタ、ヨカッタ」皆の心は一つであった。

握手するもの、抱擁するもの、そして又、一匹のムカデになって二十四本の足は威勢よくスキーコース状のブナ樹林をC1に下った。

C1では天候悪化の為、早々に昼食をとりBCまでの時間短縮をはかった。しかし運動不足の輩が多く出発の時間までダンボール製の櫓に乗り二十メートル程の滑降コースをギヤーギヤー奇声を発しては上下していた。サポートの連中はアタック隊の為に食糧、燃料などを極度に制限して「武士は食わねど高楊子」を実践していた様子がかがわれホロリとさせられた。天気は悪化しパッキングを完了したザックの上に、シヨイコの上にと雪は積って来た。気温は零下三度。全員の斉唱する「ことほげ、今日の山」は吹雪く山涛に

こだまして我々の胸に忘れ得ぬ思い出を刻むかのようにであった。

十一時四十分、サポート隊にとつては住みなれたアオの背C1地点を出発した。風雪状態であったが下り専門なのでピッチは快調、ワツパをはずしてペースを崩す者も既になかった。雪は程よく締り固くなし軟くなし、ただ吹き上げる南西風が呼吸を詰らせて苦しい。

無言の一隊は第二見晴台を十二時十分通過する。これより無名峰にかけてはボカチン地帯であり重量級通過後は大穴があき笹や灌木にワツパをとられる。針葉樹におゝわれた無名峰付近で全員一本にありつく。十分間、風に背を向け何がしかのカロリー補給を行う。テルモスの熱い紅茶のうまいこと。風速三十メートル、気温零下二度。

この頂上付近はうっかりすると迷い易い地点である。来る時もトップは別の尾根に踏み込んでしまい今またトップはよからぬ針路で入りかけた。一本の間に二名が降路を偵察する。やはり針路に誤りあり右手右手と行くべき所を左手に入りかけている。南面は樹林帯で沢に降りるような急斜面であり、それをやゝ右手をさして急降すると裸で薙ぎ落ちる西斜面に出て痩せた梶尾根と合する。

軟雪の樹林帯から我々は堅い雪庇へと乗り移る。雪庇を降下する頃はもっとも風強く視界狭く途中で相談した関山アタックも断念せざるを得なかった。天気がよければほんのお遊びで登れる小ピークであるが緊急避待が今の課題であれば無理をして一隊を出すのは危険である。関山のアタックはサポートの皆さんに譲ろうと決めていたのに残す一峯の未練も一薙ぎにするこのすぎましさ。

例の雪庇の階段を工作隊が補修して全員無事突破。樹林帯で一本である。十三時五分より十分間。気温は零下二度、シヨイコの二人を残して十名、トップの畠山のシリセードに従い次々に滑り落ちる。笑いとスピードを楽しむことしばし、シヨイコ組には気の毒に思いつつもタマラないこのスピード感。たちまち引き離してしまった。二又付近で全員集合。その頃誰いうことなくニックネームが流行り出し、畠山をコルゲンの蛙、今出夫妻をポパ

イトオリーブ、越後をアトム、田中を鉄人28号、沼田を狼少年ケン、中林をトムとジェリーのジェリー、江間をエイトマン、風間をソニー坊や、工藤をノラクロ、そして千葉をブルートとはおだやかでない。

さすがに大先輩の高橋氏には恐れおののいて愛称を捧げる輩はいなかった。かくしてワイワイガヤガヤとBCに着いたのが十四時十分。三時間である。思えば登りに費やした同区間のタイムは六時間であった。

全員雪を避けて暗い小屋に入り込む。取っておきの食糧があちこちから出される。今出会長より全員に直径六センチの金色燃然たる金メダルが授与された。或る者はおし戴いて呑み込んでしまった。全員のフェアプレーと優勝を讃えたつもりらしい。

それから転んでもただで起きない人が取ってきた“サルノコシカケ”に全員マジックで記念のサインをした。高橋さんは○善五郎と書いた。この○は人の和、皆さんのチームワークを誉めた意味とのこと。

県警のトラックが来るまで時間があったので有志により国道までの雪道の舗装工事を行った。ワッパなしで行けるように何度も往復して固めておいた。又時間近くには見張りを交代で行い迅速な乗込みに備えた。

十六時全輪にチェーンをつけたトラックが到着した。

小雪、風速十五メートル、気温零下三度の中をBC撤退、トラックに乗り込む。雪が吹き込む機動車の中に目白押し「チャリ、チャリ、チャリ」というチェーンの音はトロイカの鈴の音か。耳に心地よく振動も心強いが、山をはなれる一抹のわびしさが皆の胸にうずまくのか言葉少なに物言いたげに互いに顔を見合わせていた。

トラックは作並でチェーンをはずしスピードを上げて夕景色の国道を東進する。やがて火灯し頃の仙台の町に入り十七時四十五分懐かしい仙台YMCA会館に到着した。留守部隊がわつとばかり転り出て来た。

装備を玄関前に運搬してデポり各方面に電話で連絡をとる。ストーブの燃える社交室に全員が会合した。

皆の顔が輝いていた。留守部隊はオール女性。カレーライスの炊き出しに舌づゝみをつ。程なく連絡本部から岳連会長伊達氏、実行委員長渡辺氏、常盤氏らが訪問されて成功を祝って下さり清酒一本の奇進があった。

行動中の状態をかいつまんで報告し、質問にも色々と話に花が咲いた。

五日間共に寝食し共に苦楽した十二人も別れの時が来た。我々の任務は終わったのだ。しかしリレーされた縦走隊はこれから新たな行動がはじまっている。諸隊の健斗を祈って帰宅した。

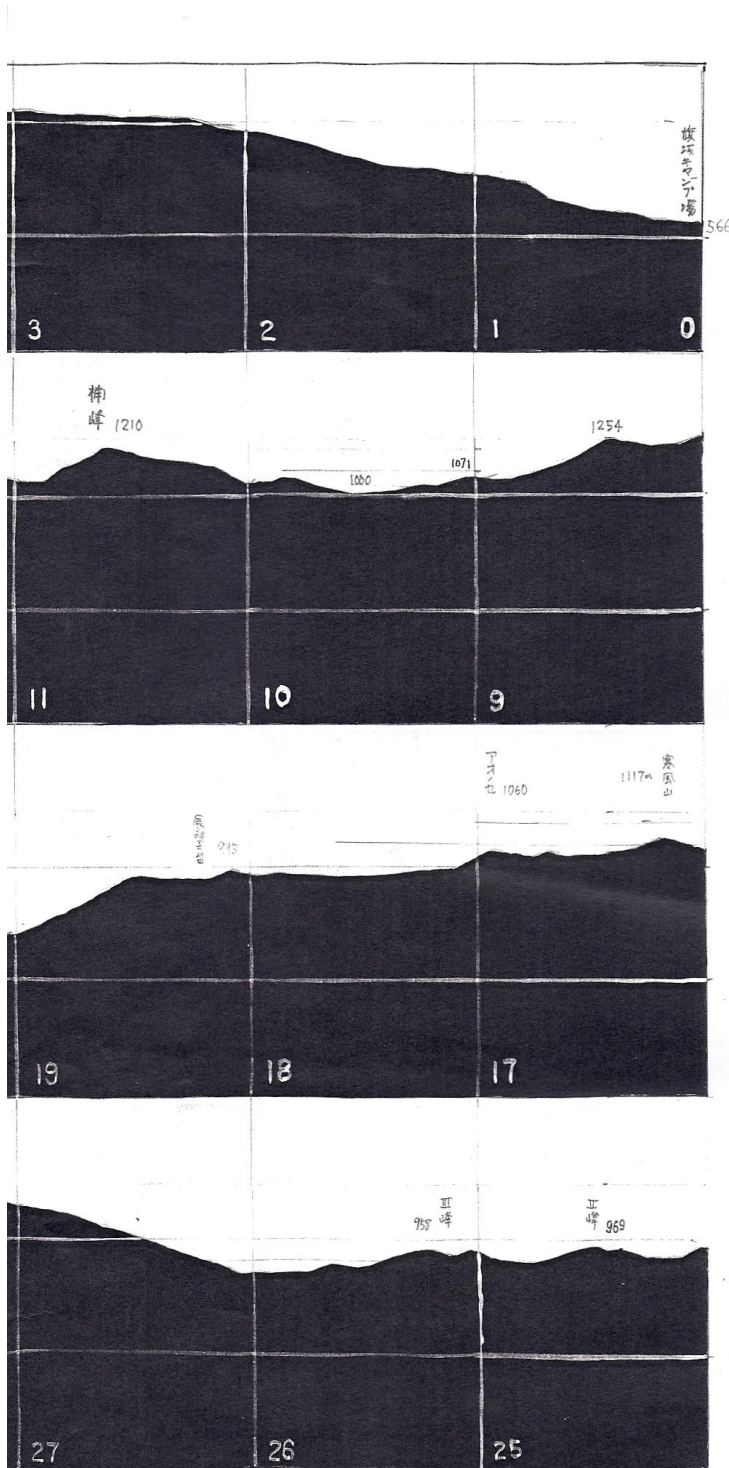
市役所隊はリレー後すぐに行動を試みたが無理の為引返した。そしてサポート隊共に船形頂上に停滞となり凄く苦しい状態となり縦走を断念、後日再び決行を誓って全員下山された。その後五月連休に同隊とは別に佐藤長司氏ら一名の有志隊が鍋越峠より逆縦走を敢行され超人的ファイトで重なるピンチを突破し二泊三日で定義に無事下山。市役所山岳会の面目を施した。

各区間のトレースも四月、五月中に別個に行われぼつりぼつりと宮城県境尾根も塗りつぶされていった。

天候さえあれ程悪くなかったならスキツとしたリレー縦走が出来たであろうに思うだに残念でならない。しかしこの県境縦走が今後の重大な参考資料となり、いつの日かもっと充実した大縦走となって実現される日を我々は期待してやまない。

冬の山は何年たっても百年前と変りはあるまい。

2004年（平成16年）縦走の際の高低図



船形山・面白山間 稜線縦走計画

東根	船形山	升沢
天童	南沢峠	
山寺	作並	

期間 2004年4月1日(木)～4日(日) (3泊4日間)

メンバー① 木内利則 373-4893

今出隆康 251-0006

送りサポート隊 西田猛和氏

1日午前6時今出

6時15分 木内宅 旗坂コース

装備 エスパーズ(2・3人用テント)
 シュラフ、シヨラフカバー、銀マット
 エマット、セッケル・ワカン、ストック
 ガソリンコンロ、コッヘル、テルモス
 プラブーツ、スパッツ、ラトルネ、着
 タンス、ラジオ、サンダース 雪袋
 ゴアテック、手袋、ミトン、スリッパ
 自出糧、ローソク、赤布、オル

食糧 夕食1、朝食2(今出)
 夕食2、朝食1(木内)

エスケープ 粟畑 黒伏スキー場・南山トニビル(48)

連絡本部 仙台YMCA山岳会

- 1(木) 大竹 245-7533
- 2(金) 大竹
- 3(土) 西田 275-4326
- 4(日) 太田(嘉) 241-3104

